

主体性から創造性への学習過程

人間は元来創造的存在である。子どもに中心をおくヒューマンズムの教育系譜は、新教育運動として自発性・自主性を重視してきた。このことはさらに創造性の教育へ発展するであろう。

戦後の経験学習は、子どもの興味や意欲をたいせつにし、考える学習としての主体性を育てようとした点に特徴があった。しかし、指導内容の系統性に弱く、学力低下の批判が生まれて系統学習が出現し、さらに新しい系統学習ともいえる教育の現代化が今日、世界をふうびしている。

その時点にあって重要な問題は、現実の子どもと、高い水準の文化や教科との二元論傾向に陥ることである。それにこたえて、ブルナーは、著書『教育過程』に一つ提案をしている。わたしたちはその提案を重視し学習者に主体性を求め、高度な文化、複雑な社会に対処しうる強力な人間性の啓培をめざして、「主体的学習」を提唱したのである。著書『主体性を育てる学習過程』（1966年4月明治図書出版）は、昭和38年から3か年間の実践的研究の成果をまとめたものである。

さて、今日的意義において創造性教育がとみに強調されてきた。そのねらいは、科学、技術の飛躍的革新と人間性、環境の変貌に対応できる創造豊かな人間の育成であろう。とすれば、この「主体的学習」はそれにこたえうるだろうか。本校の子どもは、学習意欲は高まり、自主的に集中的にねばり強く思考し、小集団学習も相当に向上しているが、価値創造への芽は育ちつつあるのか。創造性豊かな子どもが育ちつつあるだろうか。

もともと、わたしたちの「主体的学習」は、広く創造性の教育内容を内包するものであった。したがって、教科の本質が直接創造を生命とする図工・音楽や算数の発見学習など、その研究の手はすでにさしのべられていた。しかし、創造の視点から、的確な理論と具体的な指導の手だてに、じゅうぶんの配慮がなされていなかった。それを反省し、主体的学習の深化充実の道として昭和41年から創造性教育の研究へと発展させたのである。

研究の第一年次は「創造性の意味」「主体性との関係」など理論追求。さらに問題は「創造性からの子どもの実態の追求」であった。それにこたえて本学心理学教室の林助教授を中心にその調査が行われ、年々追跡研究がなされている。わたしたちはそれらの研究を通して子どもの新しい姿を発見した。そこで、「学習場面に現れる創造性の具体的な姿」を描き出し、それを学習指導の目安とした。この仮説に立って、きめ細かな授業研究が展開されていった。

第二年次からは、創造的活動をより旺盛にすることを通して、創造性を育てるという立場から、わたしたちの「主体的学習」のすべてを再検討した。まず、教材内容については、構造転換理論も取り入れ、所産の側からの追求がなされ、教材変形説を打ち出し、学習過程としては、①子どもの疑問や意欲をよりいっそうもり上げ、子ども自らが創意を生む学習方法を学びとり、真の学力を身につける指導過程の追求。②集団による創造活動からの学習形態の追求。③開発の技法などの活用による教師の発問・助言など、指導技術の研究とその体制化を図ったのである。

以上「主体性から創造性へ」と発展した経緯と研究の概要を述べたのであるが、本書はこうした研究の成果をその内容として集録したものである。その構成は原理編と実際編とに大別し、原理構成にあたっては、科学的な解明とともに絶えず授業研究を繰り返しながら、その実践を通して、原理の確立をはかった。また実践編においては主体的学習をふまえながらも、それを乗り越え、創造性の原理をどう生かすかをくふうしつつ、各教科・道徳・特活の各分野にわたって、現在到達した研究結果を前著の姉妹編としてまとめたのである。

なお不備な点、未熟な点も少なくないので、多くの研究家・実践家の率直なご批判を賜りたいと思う。

この研究を進めるにあたって、本学の塚本正三郎教授・林昌三助教授始め多数の方々の、ひとかたならぬご指導に深く感謝の意をささげるとともに、本書の出版を心よく引き受けてくださった明治図書、特に編集部の江部満氏、樋口雅子氏に対して厚くお礼申しあげる次第である。

昭和44年3月

福岡教育大学附属久留米小学校 校長 渡辺 光